

トマス・アクィナス『悪について』 第8問第2~4項・高慢（翻訳）

松根伸治

第2項 高慢は特殊な罪であるか¹

第二に、高慢（*superbia*）について、それが特殊な罪かどうかが問われる²。高慢は特殊な罪ではないと思われる。というのは――

異論1. 特殊な罪はすべて、特定の徳や特定の魂の能力を破壊する。ところが、高慢はあらゆる徳と魂のあらゆる能力を破壊する。というのは、グレゴリウスが『道徳論』第34巻³で次のように言っているからである。「高慢はひとつの徳を消滅させるだけでは決して満足せず、魂のあらゆる部分へと及ぶ。それはちょうど、全身性の致命的な病気が体全体を破壊してしまうのと似ている。」さらに、イシドルスも『最高善について』⁴で、高慢はすべての徳の破滅であると言っている。それゆえ、高慢は特殊な罪ではない。

異論2. 自分の意志を上長の意志よりも優先することは高慢にふるまうことである。ところで、大罪を犯す人は誰でも、自分の意志を上長の意志、つまり神の意志よりも優先させるから、高慢にふるまっている。それゆえ、すべての罪は高慢であり、したがって高慢は特殊な罪ではない。

異論3. これに対して次のような主張があった。高慢は自己の卓越に対する愛である限りにおいては特殊な罪であり、他方、神に対する侮蔑を意味する限りにおいては一般的な罪である、と。――これに反論しよう。特殊な罪はすべて固有の対象領域をもつ。たとえば、貪食は食べ物を、色欲は性的ことがらを、強欲は富を対象領域とする。これに対して、自己の卓越に対する愛である限りにおける高慢は固有の対象領域をもたない。なぜなら、グレゴリウスが『道徳論』第34巻⁵で言うように、「或る者は黄金により、或る者は雄弁によって思い上がる。卑しい地上の事物を誇って思い上がる者もいれば、至高の天上的な徳を誇って思い上がる者もいる」からである。それゆえ、自己の卓越に対する愛である限りにおいて、高慢は特殊な罪ではない。

異論4. さらに、神への侮蔑を意味する限りにおいて、高慢は一般的な罪ではないと思われる。

¹ 罪源についての原理的考察を行なう第8問第1項は、『アカデミア』人文・自然科学編6号（2013年）213-228頁に拙訳が掲載されている。

² 第2項の並行箇所：ST I-II, q.84, a.2; II-II, q.162, a.2; *In Sent.* II, d.5, q.1, a.3; d.42, q.2, a.3, ad1.

³ Gregorius, *Moralia*, XXXIV, 23, 48 (CCSL 143B, 1767).

⁴ Isidorus, *De summo bono (sive Sententiae)*, II, 38, 7 (CCSL 111, 168).

⁵ Gregorius, *Moralia*, XXXIV, 23, 49 (CCSL 143B, 1768).

というのも、弱さや無知から罪を犯す人は侮蔑によって罪を犯すのではない。ところが、弱さや無知から罪を犯す多くの人は大罪を犯している。それゆえ、すべての大罪が侮蔑に由来するものではない。したがって、神への侮蔑を意味する限りでの高慢は一般的な罪ではない。

異論5. 一般的な悪に対立するのは、特殊な善ではなく一般的な善である。ところで、神への侮蔑に対立するのは、神への畏敬という特殊な善であり、これは特定の仕方での賜物に属する。それゆえ、神への侮蔑は一般的な罪ではなく、したがって、神への侮蔑を意味する限りでの高慢も一般的な罪ではない。このようにして、先に述べられた区別は役に立たない⁶。

異論6. すべての罪を悪質さの点において仕上げるものは一般的な罪である。ところが、グレゴリウスが『エゼキエル書註解』⁷で言うように、高慢はそのようなものである。それゆえ、高慢は一般的な罪である。

異論7. 徳と同じく罪も対象に即して区別される。ところで、高慢は他のいくつかの罪と同じ対象をもっている。たとえば、嫉妬は自己の卓越を求めて他者の善を悲しみ⁸、虚栄は人々の評判における卓越を欲し、怒りは勝利という一種の卓越に属する報復を欲する⁹。それゆえ、高慢は他の罪から区別された特殊な罪ではない¹⁰。

異論8. それがなければどんな罪も成り立ちえないものは、すべての罪に共通なものである。ところで、高慢はそのようなものである。なぜなら、アウグスティヌスは『自然と恩恵』¹¹で、「高慢という呼び名なしには、あなたは何の罪も見出すことはないだろう」と言っているし、プロスペルは『観想的生について』¹²で、高慢がなければどんな罪もありえないし、ありえなかったし、将来もありえないと言っているからである。それゆえ、高慢は一般的な罪である。

異論9. あらゆる罪と置き換えられるものは一般的な罪である。ところで、高慢はそのようなものである。というのも、アウグスティヌスは『自然と恩恵』¹³で、「罪を犯すことがおごり高ぶることであると同様、おごり高ぶることは罪を犯すことだ」と言っているからである。それゆえ、高慢は一般的な罪である。

異論10. 『シラ書』第10章[14節]¹⁴の「人の罪の始めは神に背反すること」について、『註釈』¹⁵は「神から離れること以上に大きな背教はなく、これが高慢と呼ばれるのは正当である」と言う。ところ

⁶ 異論3～5の一連の議論は、異論3冒頭の高慢の二区分を否定するためのものである。異論3は、「自己の卓越への愛」としての高慢が特殊な罪とは言えないことを、異論4と異論5は、「神への侮蔑」としての高慢が一般的な罪とは言えないことをそれぞれ主張している。この三つの異論では、「高慢は特殊な罪であるか」という表題の設問自体に対する応答よりも、この問いを考える上で必要なものとしていったん導入された区分を無効化することに議論の力点がある。

⁷ Gregorius, 正しくは *Moralia*, XXXIV, 23, 48 (CCSL 143B, 1767).

⁸ cf. Damascenus, *De fide orthodoxa*, II, 14 (Buytaert 121); Nemesius, *De natura hominis*, 19 (Verbeke 101).

⁹ cf. Aristoteles, *Rhetorica*, II, 2, 1378a30-b2.

¹⁰ 高慢は対象として「卓越」をめざす点で、嫉妬、虚栄、怒りなどの他の罪と共通する。したがって、固有の対象に即して他の罪から種的に区別された特殊な罪として高慢を措定することはできない、という異論。

¹¹ Augustinus, *De natura et gratia*, 29, 33 (CSEL 60, 257).

¹² Prosper (ps.) = Iulianus Pomerius, *De vita contemplativa*, III, 2, 1 (PL 59, 476B).

¹³ Augustinus, *De natura et gratia*, 29, 33 (CSEL 60, 257).

¹⁴ 章・節番号はヴルガータ版による（以下同様）。新共同訳では10, 12にあたる。

¹⁵ *Glossa ordinaria*, in *Eccli* 10, 14.

で、大罪を犯す人は誰でも神から離れる。それゆえ、大罪を犯す人は高慢であり、この意味で高慢は一般的な罪である。

異論 11. 同じ章において別の『註釈』は、「欲望と高慢を警戒しようではないか。これらは二つではなくひとつの悪である」と言う。それゆえ、高慢は他の罪から区別された特殊な罪ではない。

異論 12. 『ヨブ記』第 33 章〔17 節〕の「人を不正から遠ざけるために」¹⁶ について、『註釈』¹⁷ は、「創造主に逆らっておごり高ぶるとは、罪を犯すことによって創造主の掟を超え出ることである」と言う。ところで、罪を犯す人は誰でも神の掟を踏み越える。というのも、アウグスティヌスが『ファウストゥス駁論』第 20 巻¹⁸ で、「罪とは永遠の法に反して語られたこと、なされたこと、あるいは欲望として抱かれたことである」と言っているからである。それゆえ、罪を犯す人は誰でも高ぶっており、すべての罪は高慢である。

異論 13. アンセルムス¹⁹ は、魂は自分の善を必然的に欲すると言っている。ところで、必然的に生じることには罪ではない。それゆえ、高慢は罪ではなく、したがって特殊な罪でもない。

異論 14. もし高慢が特殊な罪だとしたら、七つの根源的悪徳のうちの一つであるはずである。ところが、イシドルスは『最高善について』²⁰ で、七つの根源的悪徳の中に高慢を含めず、その代わりに虚栄を入れている。それゆえ、高慢は特殊な罪ではない。

異論 15. アウグスティヌスは『自由意思論』²¹ で、高慢は自分の善に対する愛であると言っている。ところが、これはあらゆる罪において共通なことである。それゆえ、高慢は一般的な罪である。

異論 16. あらゆる罪において形相的位置を占めるものは特殊な罪ではない。ところが、高慢はそのようなものである。というのも、アウグスティヌスは『自由意思論』²² で、罪を犯すとは不変の善を軽んじ可変的善に執着することだと言っている。これらのうち前者、すなわち不変の善を軽んじることは〔神から〕逸れることに属し、このことはあらゆる罪において形相的位置を占める。これはちょうど、愛徳によって神へ向かうことが諸々の徳において形相的位置を占めるのと同様である。ところで、神を軽んじることは高慢に属する。それゆえ、高慢は一般的な罪だと思われる。

異論 17. 神による秩序づけに由来するものは罪ではない。ところが、高慢は神の秩序づけに由来する。というのも、『イザヤ書』第 60 章〔15 節〕には「私はあなたを永遠の誇りへと据えよう」と言われており、この箇所についてヒエロニムスの『註釈』²³ は、善い誇りと悪い誇りがあると言う。さらに、『箴言』第 8 章〔18 節〕では、「私とともに富と栄光があり、誇らしい財産と正義がある」

¹⁶ トマスは *ut avertat hominem ab iniquitate* と引用しているが、ヴルガータでは *ut avertat hominem ab his quae facit et liberet eum de superbia* 「人を彼のなすことから遠ざけ、人を高慢から解き放つために〔神は……〕」である。ST II-II, q.162, a.2, arg.2 ではこのことと同じ文言だが、ST II-II, q.33, a.7, ad1 はヴルガータに即して逐語的に引いている。

¹⁷ *Glossa ordinaria*, in Iob 33, 17. 引用元は Gregorius, *Moralia*, XXIII, 22, 44 (CCSL 143B, 1177).

¹⁸ Augustinus, *Contra Faustum*, 正しくは XXII, 27 (CSEL 25-1, 621): *peccatum est factum vel dictum vel concupitum aliquid contra aeternam legem*. トマスは ST I-II, q.71, a.6 でこの罪の規定をとりあげて主題的に論じている。cf. Petrus Lombardus, *Sententiae*, II, d.35, c.1, n.1.

¹⁹ Anselmus, *De casu diaboli*, 13 (Opera I, 257).

²⁰ Isidorus, *De summo bono (sive Sententiae)*, IV, 40, 2 (PL 83, 1178D). ただしこの箇所は Gregorius, *Moralia*, XXXI, 45, 87 (CCSL 143B, 1610) の引用である。

²¹ Augustinus, *De libero arbitrio*, III, 24, 72 (CCSL 29, 318).

²² Augustinus, *De libero arbitrio*, I, 16, 35 (CCSL 29, 235); III, 1, 1 (CCSL 29, 274).

²³ *Glossa ordinaria*, in Is 60, 10. 引用元は Hieronymus, *In Isaiam*, XVII, 61 (PL 24, 601-602 [625A]).

と神の知恵が語っている。それゆえ、高慢は特殊な罪ではない。

しかし反対に――

反対異論 1. アウグスティヌスは『自然と恩恵』²⁴で、「彼には探求して見出してもらいたい。神の法によれば高慢が他の悪徳からきわめて明瞭に区別された罪であることを」と言っている。

反対異論 2. 同所で、高慢によってなされるのではない多くのことが邪悪になされると言われている。それゆえ、高慢は一般的な罪ではない。

反対異論 3. 一般的な罪に別の罪が先立つことはない。ところが、高慢に先立つ別の罪がある。というのも、『シラ書』第10章〔14節〕²⁵に、「人の高慢の始めは神に背反すること」と言われているからである。それゆえ、高慢は一般的な罪ではない。

反対異論 4. 他の罪と同列に区分された罪はすべて特殊な罪である。ところが、『ヨハネの手紙一』第2章〔16節〕「この世にあるものはすべて、肉の欲か目の欲か生のおごり (*superbia vitae*) である」から明らかな通り、高慢はそのようなものである。それゆえ、高慢は特殊な罪である。

反対異論 5. 特殊な活動をそなえた罪はすべて特殊な罪である。ところが、高慢はそういうものである。なぜなら、アウグスティヌスが『自然と恩恵』²⁶で言うように、善い行為において警戒すべきなのは高慢だけだからである。さらに、最初の高慢は神から離れ去り、最後の高慢は〔神に〕戻ってくるとグレゴリウス²⁷が言っているからである。それゆえ、高慢は特殊な罪である。

反対異論 6. 最上級によって言い表わされることは唯一のものにしか適合しない²⁸。ところで、『詩篇』〔第18篇 14節〕²⁹の「私は最大の罪から浄められるだろう」について『註釈』³⁰が言うように、高慢は最大の罪である。それゆえ、高慢は特殊な罪である。

第2項主文 次のように言わねばならない。この問題を明らかにするためには、高慢という罪がどんなものかを理解する必要がある。そうすればその後で、高慢が特殊な罪かどうかを理解できるようになるからである。

まず、すべての罪は何らかの自然本性的欲求に基礎をもつことを考察しなければならない。そし

²⁴ Augustinus, *De natura et gratia*, 29, 33 (CSEL 60, 257). 「彼」はペラギウスのこと。異論解答9を参照。

²⁵ 新共同訳では 10, 12 にあたる。Initium superbiae hominis apostatare a Deo. 同じ箇所が異論 10 では、superbiae (高慢の) ではなく peccati (罪の) と引用されていた。第1項異論解答1も参照。

²⁶ Augustinus, *De natura et gratia*, 32, 36 (CSEL 60, 260): etiam in ipsis recte factis [superbia] cavenda est. 「正しくなされた行為においてさえ高慢を警戒しなければならない。」 cf. *De natura et gratia*, 27, 31 (CSEL 60, 255).

²⁷ むしろ *Glossa Petri Lombardi*, in Ps 18, 14 (PL 191, 213D). 引用元は Augustinus, *Enarrationes in Psalmos*, 18, enarr. I, 14 (CCSL 38, 105): hoc est ultimum redeuntibus ad Deum, quod recedentibus primum fuit. 「神から遠ざかる人々にとって最初のものであったこの罪が、神へと戻る人々にとっては最後の罪である。」すなわち、高慢は神からの離反を引き起こす最初のきっかけであると同時に、罪からの回復と神への回心を最後まで阻害する要因である。ここでトマスは *superbia prima recedit a Deo, ultima redit* と簡略化しているが、*ST II-II*, q.162, a.7, ad4 には原文により近い引用が見られる。

²⁸ Aristoteles, *Topica*, V, 5, 134b24.

²⁹ 新共同訳では 19, 14 にあたる。

³⁰ *Glossa Petri Lombardi*, in Ps 18, 14 (PL 191, 214A). 引用元は Augustinus, *Enarrationes in Psalmos*, 18, enarr. I, 14 (CCSL 38, 104).

て、自然本性的に望まれる善はすべて神の善性の何らかの類似であるから、人間はどんな自然本性的欲求によっても神の類似を欲求している。したがって、アウグスティヌスは『告白』第2巻³¹で、神に呼びかけてこう言う。「あなたへと戻るときでなければ純粹で透明な私たちで見出せないものをあなたの外に求め、あなたから離反するとき、魂は姦淫を犯す」と。ここで言う姦淫とは罪を犯すという意味である。しかし、欲求を方向づけるのは理性の仕事であり、理性が神の法によって教導されているという意味ではとりわけそうである。したがって、欲求が自然本性的に望んだ善へと向かうときに理性の規準に従っている場合、その欲求は正しいものであり徳を反映したものとなる。これに対して、欲求が理性の規準を踏み越える場合、あるいは理性の規準から欠け落ちる場合、どちらの場合にも罪がある。たとえば、知りたいという欲求は人間にとって自然本性的なものである³²。したがって、正しい理性の命じるところに即して人が知を熱心に探求するなら、その欲求は徳をそなえた賞賛すべきものである。他方、理性の規準を踏み越えるなら好奇心という罪があるし³³、理性の規準に達しないなら怠りの罪がある。

ところで、人間が自然本性的に望むもののうちのひとつは卓越 (excellētia) である。というのも、何らかの卓越において成り立つ完成を、欲求する善のうちに望むことは、人間だけでなく各々の事物にあっても自然本性的なことだからである。したがって、神によって教導された理性の規準に従って欲求が卓越を求める場合には、その欲求は正しいものであり高邁に属する³⁴。このことは、『コリントの信徒への手紙二』第10章〔13節〕における使徒の言葉、「だが私たちは尺度を超えて（いわば他の無縁な規準によって）誇らず、神が私たちを測った規準に従って誇る」によって裏づけられる。これに対して、この規準に達しない場合に人は卑屈という悪徳におちいるし、他方、規準を超え出る場合には高慢という悪徳がある。これは高慢という名称自体が示す通りである。実際、「高ぶる」とは、卓越への欲求において適切な尺度を過剰に超え出ることには他ならない。アウグスティヌスが『神の国』第14巻³⁵で、高慢とは「転倒した高みへの欲求」だと言うのも、そのような理由からである。ただし、すべてのものの尺度は同一ではないから、或る人には高慢として帰されることが別の人には帰されないという場合はありうる。たとえば、司教が自分の卓越した地位に属する職務を遂行したからといって高慢だとされることはないが、もし仮に一般の司祭が司教の職務を行なおうとするなら、このことは彼に高慢として帰されるだろう。

したがって、卓越が何らかの確定した欲求対象としての固有の本質側面をそなえているなら、領域としては多くの場面で見出されるとしても、高慢が特殊な罪であることは明らかである。というのも、行為と習慣は対象の形相的特質に即して種的に区別されるからである。したがって、アウグスティヌスもそれぞれの罪に固有の対象をひとつひとつ割り当て——それらの対象を欲するとき、神との類似のいわば影のようなものを罪は模倣するのだが——高慢については神に呼びかけてこう

³¹ Augustinus, *Confessiones*, II, 6, 14 (CCSL 27, 24).

³² cf. Aristoteles, *Metaphysica*, I, 1, 980a21.

³³ 悪徳としての好奇心 (curiositas) については ST II-II, q.167 で論じられている。

³⁴ 高邁 (magnanimitas) という徳については ST II-II, q.129 で詳しく論じられている。

³⁵ Augustinus, *De civitate dei*, XIV, 13, 1 (CCSL 48, 434): Quid est autem superbia nisi perversae celsitudinis appetitus? Perversa enim est celsitudo deserto eo, cui debet animus inhaerere, principio sibi quodam modo fieri atque esse principium. 「ところで、高慢とは転倒した高みへの欲求以外の何だろうか。というのも、転倒した高みとは、精神が本来は固着すべきあの根源を捨て去り、或る意味で自分にとって根源となること、さらには根源であることだからである。」

言う。「高慢は高みをまねるが、万物を³⁶超えて高くある神はあなた一人だけである³⁶。」

しかしながら、高慢が何らかの意味で一般的な罪であることも二通りの仕方でありうる。ひとつは何らかの拡散³⁷によるものであり、もうひとつは結果にもとづいてである。第一の点に関しては次のことを考察しなければならない。アウグスティヌスが『神の国』第14巻³⁸で言う通り、神への愛が神の国を作るように、無秩序な自己愛がバビロンの町を作る。神への愛においては神自身が究極目的であり、正しい愛によって愛されるすべてのものがこの目的に秩序づけられる。これに対して、自己愛においては卓越が究極目的として見出され、他のすべてはこの目的に秩序づけられる。というのも、富、知識、名誉、何であれその他のものにおいて豊かであろうと求める人は、こうしたすべてのものを通じて何らかの卓越を意図しているからである。ところで、行為に関わるすべての習慣とすべての技術において、目的に関わる技術や習慣は、目的のための手段に関わる技術や習慣を支配力によって動かすという事実を考察しなければならない。たとえば、目的として船の使用が属する航海術は造船術を支配し³⁹、同様のことがすべての技術と習慣において見出される。したがって、神に対する愛である愛徳もまた、他のすべての徳を支配する。固有の対象をもつことを考えれば、たしかに愛徳は特殊な徳ではあるが、しかし、その支配力の拡散とでも言うべきものに即して見れば、愛徳はすべての徳に共通である。そこから、愛徳はすべての徳の「形相」あるいは「母」と言われる⁴⁰。これと同様に、固有の対象の本質側面に即して考えれば、高慢はたしかに特殊な罪だが、しかし、その支配力の何らかの拡散に即して見れば、すべての罪に共通の罪である。だからこそ、グレゴリウスの『道徳論』第31巻⁴¹から明らかな通り、高慢はすべての罪の「根」あるいは「女王」と言われる。

他方、第二の点に関しては次のことを考察しなければならない。各々の罪は意図と結果の双方に即して考察されうる。実際、結果的には罪であるが、意図の面ではそうでないということが時として生じうる。たとえば、敵だと思い込んで父親を殺すという場合、この人はたしかに結果としては

³⁶ Augustinus, *Confessiones*, II, 6, 13 (CCSL 27, 23): Nam et superbia celsitudinem imitatur, cum tu sis unus super omnia deus excelsus. アウグスティヌスが16歳の頃の梨盗みを回想し、悪徳を分析している箇所。悪徳には「欠け落ちた影のような一種の形相 (quaedam defectiva species et umbratica)」が見出される (II, 6, 12)。様々な悪徳も或る意味で善を求め模倣しているが、本当の善は神のうちにしかない。「あなたから自分を遠ざけ、あなたに逆らって高ぶる者たちはみな、転倒してあなたを模倣している」(II, 6, 14)と述べたアウグスティヌスは、盗みにおいて自分は結局何を愛したのかと自問し、「全能に対する暗闇のような類似 (tenebrosa omnipotentiae similitudo)」に言及している。——魂は罪においてさえ神の何らかの類似を追い求めるという説明は *De trinitate*, XI, 5, 8 にも見られる。

³⁷ 「拡散・拡張 (diffusio)」は、*ST II-II*, q.162, a.2, c. では他の罪に対する高慢の「流入 (redundantia)」と表現されている。高慢は他の諸々の罪のうちに、いわば込み渡っているという論点。

³⁸ Augustinus, *De civitate dei*, XIV, 28 (CCSL 48, 451): Fecerunt itaque civitates duas amores duo, terrenam scilicet amor sui usque ad contemptum Dei, caelestem vero amor Dei usque ad contemptum sui. 「こうして二つの愛が二つの国を作った。神の侮蔑にまで至る自己愛が地の国を、自己の侮蔑にまで至る神への愛が天の国を作った。」cf. *Enarrationes in Psalmos*, 64, 1, n.2 (CCSL 39, 824).

³⁹ cf. Aristoteles, *Physica*, II, 2, 194b5-7. 航海術と造船術の例は、*ST I-II*, q.5, a.6, ad1; q.8, a.2, ad3; q.9. a.1, c. でも述べられている。

⁴⁰ cf. *Glossa Petri Lombardi*, in Rm 1, 17 (PL 191, 1324B); *Sententiae*, III, d.23, c.3, n.2 et c.9, n.2.

⁴¹ Gregorius, *Moralia*, XXXI, 45, 87 (CCSL 143B, 1610): Ipsa namque vitiorum regina superbia. 「諸々の悪徳の女王が高慢に他ならない。」 Radix quippe cuncti mali superbia est. 「すべての悪の根は高慢である。」

父親殺しの罪を犯すが、しかし、意図に即してはそうではない。また、或る人々について⁴²、「ミレトス人は実際には愚か者ではないが、愚か者のような行動をする」と言われているのもこれに似ている⁴³。したがって、高慢の罪が結果に即して受け取られるなら、高慢はすべての罪の中に共通して見出される。というのは、上長の規準に従わないことは高慢の何らかの結果だが、これは神の法に従わないという意味であらゆる罪人が行なっていることだからである。これに対して、意図に即して考えれば、常にすべての罪において高慢の罪があるわけではない。なぜなら、神と神の法に対する現実的な侮蔑から個々の罪が常に行なわれるわけではなく、時には無知から、時には弱さから（すなわち何らかの情念から）行なわれるからである。このような理由で、アウグスティヌスは『自然と恩恵』⁴⁴で、高慢という罪は他の罪から明瞭に区別されたものだと言うのである⁴⁵。

異論解答 1. 高慢がすべての徳を消し去り、魂のすべての能力を減ぼすのは、すでに〔主文で〕述べた通り、その支配力の何らかの拡散による。

異論解答 2. 自分の意志を上長の意志よりも優先させることは、たしかに高慢な行為だが、しかし、すでに述べた通り、このことは高慢であろうとする意図から常に生じるとは限らない。

異論解答 3. すでに述べたように、対象の形相的特質を考えるなら、たとえこの形相的特質がすべての罪において見出されうるとしても、高慢はやはり固有の対象領域をもつ。これはちょうど、哲学者が『倫理学』第4巻⁴⁶で言うように、高邁がひとつの特殊な徳であると同時に、諸々の徳の行為において大いなることをめざすのと同様である。

異論解答 4. 神への侮蔑を意味する限りでの高慢は、意図の面では一般的な罪ではありえず、転倒した卓越への欲求を意味する限りでの高慢よりもさらに特殊な罪である。というのは、神を軽んじる場合だけでなく人間を軽んじる場合にも、転倒した卓越への欲求はありえるからである。しかしこれに対して、神への侮蔑が結果の面から考えられる場合には、すでに〔主文で〕述べたことから明らかなように、高慢はすべての罪の中に、弱さや無知から犯される罪の中にも保たれている。

⁴² レオ版 de quibusdam に従う。マリエッティ版は a quibusdam（或る人々によって）。

⁴³ Aristoteles, *Ethica Nicomachea*, VII, 8, 1151a9-10. 無抑制は本来の意味での悪徳と区別すべきだが、現われてくる行動の結果は放埒な人の悪徳や不正に似ていると述べられている箇所。「ミレトス人は……」はデモドコスという詩人の言葉で、これをアリストテレスが引用している意図は、身についた本来の性質としては愚かとは言えない人が、結果的には愚かだと判断される行動をする場合があるということである。

⁴⁴ Augustinus, *De natura et gratia*, 29, 33 (CSEL 60, 257).

⁴⁵ 主文の要点をまとめておこう。トマスは高慢が特殊な罪と言える面と一般的な罪と言える面とを論じるが、二種類の異なる高慢があるということではなく、考察する観点の区別である。異論3冒頭で言及された高慢の二区分がより精緻に組み立て直されている。〔1〕様々な場面で高慢が見出されるとしても、「卓越」という対象の本質側面によって高慢は他の罪と明確に区別できるから、種的限定をそなえた特定の罪（speciale peccatum）だとたしかに言える。〔2〕しかし、二つの側面から高慢は一般的な罪（generale peccatum）と見なされう。〔2-a〕他の罪に対してもつ支配力の広がりによって一般的性格をもつ。神への愛に対立する自己愛の世界では他者に対する卓越がいわば究極目的である。この目的のもとに他のすべての罪や悪徳が従属するという意味で、高慢はすべての罪に共通している。〔2-b〕すべての罪は結果的に見て高慢の性格をもつと言える。あらゆる罪には神の法に対する不服従という性格が共通して見出されるが、このことは高慢から生じる特徴だと見なすことができるからである。

⁴⁶ Aristoteles, *Ethica Nicomachea*, IV, 3. 「どんな徳においても大いなること〔を追求し遂行すること〕が高邁な人の特徴だと思われる（1123b30）。」「高邁は諸々の徳のいわば一種の飾りである（1124a1）。」

異論解答 5. 高慢は特殊な罪であるとはいえ、拡散と結果によってすべての罪の中に見出される。これと同様に、神への畏れは特殊な賜物であるとはいえ、諸徳のすべてのはたらきの中に同様の仕方で見出されうる。

異論解答 6. 高慢が前述のすべての罪〔＝七つの罪源〕を悪質さの点で仕上げるというのは、高慢が本質的にすべての悪徳に等しいからではない。そうではなく、先に述べた二つの仕方〔＝拡散と結果〕によってである。

異論解答 7. 嫉妬、虚栄、怒りは高慢と同じ対象をもつのではなく、それらの対象は目的に向かう仕方高慢の対象に秩序づけられている。というのも、嫉妬が隣人の善を悲しみ⁴⁷、虚栄が賞賛を求め、怒りが報復を求めるのは、それらのことを通じて〔最終目的として〕何らかの卓越を得るためだからである。ここから結論づけることができるのは、高慢がそれらの悪徳と同じものだというのではなく、すでに述べたことから明らかのように、高慢がそれらの悪徳を支配するということである。

異論解答 8. 異論の典拠は、高慢であろうとする意図に関する限りではなく、高慢の結果（それなしにはどんな罪もありえない）を意味する限りで高慢について述べたものと理解される。

異論解答 9. 異論 9 に対しても同様に言うべきである。結果に即して高慢であることが罪を犯すことと置き換えられるのである。——しかしながら、両方〔＝異論 8 と異論 9〕に対して次のように言うこともできる。アウグスティヌスは『自然と恩恵』⁴⁸でこれらの言葉を自分の見解としてではなく、論敵にあたる他人の見解として述べている。だからこそ直後に、常に高慢から罪が犯されるわけではないと述べて先の言葉を否定しているのである。

異論解答 10. 神から離れることは結果に即した意味での高慢である。

異論解答 11. 異論 11 に対しても同様に言うべきである。なぜなら、罪を犯すことによって神の掟を踏み越えることは、結果に即して高慢であることだが、意図に即しても常にそうだとはいえないからである。

異論解答 12. 結果に即してすべての罪のうちにある限りで高慢を考えるなら、その場合、高慢は不変の善からの逸脱であり、欲望は可変的善への転向に他ならない。これら二つをいわば形相的要素と質料的要素として、ひとつの罪が構成される⁴⁹。なぜなら、すべての罪は不変の善から逸れ、可変的善に向かうことだからである⁵⁰。

異論解答 13. すでに〔主文で〕述べたように、理性の規準から離れる場合には、自分にとっての善に対する欲求においても罪がありうる。

⁴⁷ cf. *ST II-II*, q.36, a.4, c.

⁴⁸ Augustinus, *De natura et gratia*, 29, 33 (CSEL 60, 257). 『自然と恩恵』はペラギウスの失われた著作『自然について』に対する反論である。本項でしばしば参照される第 29 章は、「すべての罪の始めは高慢」(Sir 10, 15) という聖句について論じている。罪は神に対する侮蔑に他ならないという理由からペラギウスがあらゆる罪を高慢と同一視するのに対して、アウグスティヌスは高慢を他の罪から区別すべきだと批判する。第 29 章の説明によれば、両者は「罪の始め」の理解が根本的に異なっている。ペラギウスは高慢が様々な罪に共通する本質であるという意味に聖句を解する。他方、アウグスティヌスは一連の罪の連鎖を考えていて、最初に高慢が悪魔を墮落させ、そこから生じた人間への嫉妬と誘惑が今度はアダムの罪につながったという視点から「罪の始め」を解釈している。

⁴⁹ cf. q.4, a.2, c; *ST I-II*, q.71, a.6, c.; q.82, a.3, c.

⁵⁰ 異論解答 12 はむしろ異論 11 で引用された「欲望と高慢を警戒しようではないか」に対する説明と見なすのが適切である。あわせて、異論解答 11 を異論 12 への応答と読むほうが意味が通りやすい。

異論解答 14. グレゴリウスも『道徳論』第31巻⁵¹で、高慢を根源的悪徳のひとつとは見なさず、あらゆる罪の「女王」や「根」としている。高慢の支配力がすべての罪に拡散して及ぶからである。しかしだからといって、高慢が特殊な罪であることが排除されるわけではない。

異論解答 15. 自分にとっての善に対する無秩序な愛はたしかにすべての罪に共通して当てはまる。この意味では、類の性質が種に当てはまる仕方、それは高慢にも当てはまる。しかし、高慢こそが固有の意味で自分にとっての善に対する愛だと言うこともできる。これは、「自分にとって」と言われているものが何らかの分離を伴って理解される場合であり、すなわち、人が善を上長の善としてではなく〔それと完全に切り離された自分だけのものとして〕愛する限りにおいてである。こうしたことは固有の意味で高慢に属する。言い換えれば、自分の善を他者に由来するものだと認識できないということである。

異論解答 16. 異論は結果に即した高慢については妥当する。実際この意味では、すべての罪において不変の善が軽んじられるからである。しかし、意図に即しては常にそうであるとは限らない。

異論解答 17. 誇り・高慢と言われうるひとつめの意味は理性の規準を超え出ることである。この場合には高慢は常に罪であり、一般的にはこのような意味で理解される。これに対して、誇り・高慢と言われうるもうひとつの意味は、何か別のものを超え出ること、この場合にはヒエロニムスが言うように、誇りは善いものでありうる。たとえば、掟の命じる一般的行為を超え出、勧告にもとづく行為をなそうと欲する場合がそうである⁵²。——あるいは、「私はあなたを永遠の誇りへと据えよう」と言われる場合の「誇り」は、物質の意味で受け取られると言うこともできる。すなわち、地上的な人々が誇る大きな卓越をあなたに与えようという意味である。同様に、「誇らしい財産」という言葉も、人々が普通誇らしく思う財産について言われていると理解できる。

第3項 高慢は気概的能力のうちにあるか

第三に、高慢は気概的能力のうちにあるかどうか問われる⁵³。そうではないと思われる。というのは――

異論 1. 気概的能力は感覚的欲求の一部分であるから、気概的能力の運動はすべて何らかの情念でなければならない。なぜなら、魂の情念とは感覚的欲求の運動だからである。ところが、高慢は気概的能力に属する何らかの情念（すなわち、恐れ、大胆、希望、絶望、怒り）において成り立つものではないと思われる。それゆえ、高慢は気概的能力のうちにはない。

異論 2. 気概的能力は魂の感覚的部分のうちにあるから、気概的能力の対象は感覚で捉えられる何らかの善のみである。ところで、グレゴリウスが『道徳論』第34巻⁵⁴で言うように、感覚で捉えられる善の領域だけではなく、霊的なことがらや知性の対象となることがらにおいても、高慢は卓越を求める。それゆえ、高慢は気概的能力を基体として、そのうちにはありえない。

異論 3. 悪魔たちは非物体的であるから、彼らのうちには魂の感覚的部分はない。それゆえ、も

⁵¹ Gregorius, *Moralia*, XXXI, 45, 87 (CCSL 143B, 1610).

⁵² 掟 (*praeceptum*) と勧告 (*consilium*) の関係については ST I-II, q.108, a.4, c. を参照。

⁵³ 第3項の並行箇所: ST II-II, q.162, a.3.

⁵⁴ Gregorius, *Moralia*, XXXIV, 23, 49 (CCSL 143B, 1768). レオ版本文の XXIV は XXXIV の誤記。

し高慢が気概的能力のうちにあるとすれば、悪魔たちにおいて高慢はありえないという帰結になるであろう。しかし、このことは明らかに偽である。

異論 4. 固有の意味で言えば高慢とは神を侮蔑することである。ところが、気概的能力は感覚的魂の能力であるから、神という対象に達することはできない。それゆえ、高慢は気概的能力を基体として、そのうちにあるのではない。

異論 5. アヴィセンナ⁵⁵は気概的能力を説明して、害となるものや減ぼすものを排除するために、それらに打ち勝とうとする欲求とともに動くという性質を挙げている。ところが、こういったことは高慢には属さない。というのも、高慢は害を排除しようと意図するのではなく、むしろ善において卓越しようと意図するものだからである。それゆえ、高慢は気概的能力のうちにはない。

異論 6. 高慢は嫉妬の原因である。ところで、嫉妬は「他人の幸福に対する憎しみ」⁵⁶であるから、欲望的能力のうちにある。それゆえ、高慢は気概的能力のうちにはない。

異論 7. 高慢は気概的能力のうちではなく、むしろ理性的能力のうちにあると思われる。というのも、グレゴリウスは『道徳論』第23巻⁵⁷で高慢の四つの種を挙げて、こう言っている。「実際、傲慢な人々のあらゆる高ぶりを示す四つの種がある。第一に、自分は自分自身の力によって善をもっていると判断する場合である。第二に、自分に与えられた善は天からのものだと思いながらも、これを受け取ったのは自分の功德のおかげだと見なす場合。第三に、実際にはもってもないのに、とにかくもっていると誇示する場合。第四に、他人を軽蔑して、この所有物は自分だけが特別にもっているのだと注目されたいと欲する場合である。」ところが、これらのこと（判断する、見なす、思う、公言する、自分を他人と比較する）はすべて理性のはたらきに属する。それゆえ、高慢は理性のうちにある。

異論 8. 『箴言』第11章〔2節〕で、「謙遜があるところには知恵がある」と言われている。ところが、知恵は理性のうちにあるから、謙遜もそうである。したがって、謙遜に対立する高慢も理性のうちにある。なぜなら、対立しあうものは同一のものの中に存する性質があるからである⁵⁸。

異論 9. ベルナルドゥスは『謙遜の十二段階』⁵⁹で謙遜の完成は真理の認識だと言う。ところで、真理の認識は理性に属するから、謙遜は理性のうちにある。それゆえ、高慢も理性のうちにある。

異論 10. 哲学者は『倫理学』第3巻⁶⁰で、高慢な人は勇敢なふりをする人だと言っている。とこ

⁵⁵ Avicenna, *De anima* I, 5 (Van Riet 83).

⁵⁶ Augustinus, *Enarrationes in Psalmos*, 104, 25, n.17 (CCSL 40, 1545): *Invidia est enim odium felicitatis alienae*. 「嫉妬は他人の幸福に対する憎しみである。」

⁵⁷ Gregorius, *Moralia*, XXIII, 6, 13 (CCSL 143B, 1153). このテキストは第4項で主題的に論じられる。

⁵⁸ cf. Aristoteles, *Topica*, II, 4, 111a14.

⁵⁹ Bernardus, *De gradibus humilitatis et superbiae*, c.2, n.3 et n.5 (Opera III, 18 et 20).

⁶⁰ Aristoteles, *Ethica Nicomachea*, III, 7, 1115b29–30. 「恐ろしいものを前にして大胆さの点で過剰な人は向こう見ず (thrasus) である。だが、向こう見ずな人は自慢好き (alazōn) でもあり、勇気を装っているように思われる。」 alazōn は邦訳では「見栄坊」(高田)、「空威張り」(加藤)、「ほら吹き」(朴)で、ここで「高慢な人 (superbus)」と引用されているのはこの単語である。ラテン語訳は、*Qui autem in audendo superabundat circa terribilia, audax. Videtur autem et superbus esse audax et fictor fortitudinis*. 第二文の主語はギリシャ語では ho thrasus (= audax) だが、トマスは少し誤解していて、高慢な人も向こう見ずに見えるが、実はそうではなく勇敢なふりをする人なのだと読んでいる (*In Ethic.* III, 15, Leonina 47, 166). 同様に、*ST II-II*, q.162, a.7, arg.5 にも *superbus est fictor fortitudinis et audaciae* 「高慢な人は勇敢で向こう見ずなふりをする人である」という引用が見られる。

ろで、何かのふりをすることは理性のはたらきである。なぜなら、見せかけることは表現することだが、哲学者が『詩学』⁶¹で言う通り、これは理性にのみ属する。それゆえ、高慢は理性のうちにある。

異論 11. 『ハバクク書』第 2 章〔5 節〕の「酒が飲む人を欺くように」について『註釈』⁶²は、高慢は最初に自分自身に関して何か崇高なことを信じさせると言う。ところが、信じることは理性のはたらきであるから、高慢の最初のはたらきは理性のうちにある。それゆえ、高慢自体も理性のうちにある。

異論 12. 「汚れなき人々は幸い」〔『詩篇』第 118 篇 1 節〕⁶³についてアンブロシウス⁶⁴は、神の法のみが高慢の力を退けることができると言う。ところが、神の法は理性のうちにあるから、それによって取り除かれる高慢もまた理性のうちにある。

異論 13. グレゴリウスは『道徳論』第 31 卷⁶⁵で、高慢はすべての悪徳の女王 (regina) であると言っている。ところで、支配すること (regere) は理性のはたらきである。それゆえ、高慢は理性のうちにある。

異論 14. 『エレミヤ書』第 49 章〔16 節〕「お前の高慢もお前の傲慢も……」について『註釈』⁶⁶は、「誤りではなく高慢が異端者を作り出す」と言う。ところが、異端は理性のうちにある。それゆえ、高慢も理性のうちにある。

異論 15. アウグスティヌスは『三位一体論』第 12 卷⁶⁷で次のように言っている。下位の理性において罪があるのは、上位の理性がそれを禁じない限りにおいてである。あるいはさらに、上位の理性が同意している限りにおいてである、と。したがって、第一の罪は上位の理性のうちにあると思われる。ところで、高慢は第一の罪である。それゆえ、高慢は上位の理性のうちにある。

異論 16. 高慢は正義が禁じるものを追求しようとする運動であるとアウグスティヌス⁶⁸は言い、『教令集』第 15 事例第 1 問題⁶⁹にもそう述べられている。ところで、正義は理性に属する。なぜなら、人が当然返すべきものを他人に返すことができるのは理性を通じてだからである。それゆえ、高慢も理性のうちにある。

異論 17. 「神は自発的な違反をそのうちに見出さない限りは、怒りの器に滅びの裁きを下すことは決してないであろう」とアウグスティヌス⁷⁰は言い、『教令集』第 23 事例第 4 問題⁷¹にもそう述べられている。ところで、理性の命令に服するものが自発的と言われる。それゆえ、怒りの器に最も

⁶¹ 実際は Averroes, *Expositio Poeticae* (Minio-Paluello 44-45).

⁶² *Glossa ordinaria et interlinearis*, in Hab 2, 5.

⁶³ 新共同訳では 119, 1 にあたる。

⁶⁴ Ambrosius, *Expositio in Psalmos*, 118, sermo 7, n.10 (PL 15, 1283D [1531C]).

⁶⁵ Gregorius, *Moralia*, XXXI, 45, 87 (CCSL 143B, 1610).

⁶⁶ *Glossa interlinearis*, in Ier 49, 16.

⁶⁷ Augustinus, *De trinitate*, XII, 12, 17 (CCSL 50, 371-372). cf. Petrus Lombardus, *Sententiae*, II, d.24, cc.9-12.

⁶⁸ Augustinus, *De duabus animabus*, 11, 15 (CSEL 25-1, 70). 実際にはアウグスティヌスは、peccatum est voluntas retinendi vel consequendi quod iustitia vetat et unde liberum est abstinere 「罪とは、正義が禁じていて、かつ自由に思いとどまることのできるものを保持したり追求したりする意志である」と言っていて、『教令集』にもこの文言が引用されている。

⁶⁹ *Decretum*, C.15, q.1, I pars § 5 (Friedberg I, 745).

⁷⁰ 実際には Fulgentius, *Ad Monimum*, I, 26 (CCSL 91, 27).

⁷¹ *Decretum*, C.23, q.4, c.23 (Friedberg I, 907).

大きく減びの裁きが下されるのは高慢によるのだから、高慢は理性に属すると思われる。

異論 18. セネカは或る書簡⁷²で人間の最高の善は理性的部分のうちにあると言っている。ところで、この最高の善とは徳のことだが、すでに〔第2項で〕述べた通り、徳を減ぼすのが高慢である。それゆえ、高慢も理性のうちであり、気概的能力のうちにあるのではない。

異論 19. 高慢は気概的能力のうちではなく意志のうちにあると思われる。というのも、『マタイによる福音書』〔第3章15節〕の「だから、すべての正義を成し遂げることが私たちにはふさわしい」について、『註釈』⁷³は「つまり、完全な謙遜を成し遂げるという意味である」と言う。ところで、正義は意志のうちにある。それゆえ、謙遜も意志のうちにある⁷⁴。

異論 20. 高慢にとりわけ属するのは名誉に対する欲求だと思われる。ところで、名誉を欲することは意志のはたらきである。それゆえ、高慢は意志のうちにある。

異論 21. おごり高ぶること (*superbire*) は超えて行くこと (*superire*) である。したがって、他の諸能力を超え出る上位の能力に高慢はとりわけ属すると思われる。ところで、こういったことは、他のすべての能力を動かす意志の特徴である。それゆえ、高慢は気概的能力に属するのではなく意志に属すると思われる。

異論 22. 高慢は欲望的能力のうちにあると思われる。というのも、プロスペルの『命題集』⁷⁵では「高慢とは自己の卓越に対する愛である」と言われており、愛は欲望的能力のうちにあるからである。それゆえ高慢もそうである。

異論 23. アウグスティヌス⁷⁶によれば、楽しいことを欲し苦しいことを避けることが高慢には属する。ところが、こうしたことは欲望的能力のはたらきである。それゆえ、高慢は欲望的能力のうちにある。

異論 24. 高慢には自己の善を喜ぶことが属する。ところが、このことは欲望的能力に属する。それゆえ、高慢は気概的能力のうちではなく欲望的能力のうちにあると思われる。

しかし反対に――

反対異論 1. グレゴリウスは『道徳論』第2巻⁷⁷で、高慢に対立するものとして畏れの賜物を挙げている⁷⁸。

反対異論 2. アウグスティヌスは『神の国』第14巻⁷⁹で、高慢とは「転倒した高みへの欲求」で

⁷² Seneca, *Epistulae morales*, 76, 9–10 (Reynolds I, 238–239): In homine quid est optimum? ratio: hac antecedit animalia, deos sequitur. Ratio ergo perfecta proprium bonum est. [……] Haec ratio perfecta virtus vocatur eademque honestum est. 「人間において最善のものは何か。理性である。理性のおかげで人は動物に先んじ神々の後を追う。したがって、完成された理性が人間固有の善である。[……] この完成された理性が徳と呼ばれ、同時に高潔なものでもある。」

⁷³ *Glossa ordinaria*, in Mt 3, 15.

⁷⁴ したがって、謙遜に対立する高慢もまた意志のうちにある。

⁷⁵ Prosper Aquitanus, *Sententiae*, 294 (CCSL 68A, 329).

⁷⁶ むしろ Bernardus, *De gradibus humilitatis et superbiae*, c.12, n.40 (Opera III, 46): Proprium est superborum, laeta semper appetere et tristitia devitare. 「常に楽しいことがらを欲し、苦痛を避けることが高慢な人々の特徴である。」

⁷⁷ Gregorius, *Moralia*, II, 49, 77 (CCSL 143, 106).

⁷⁸ ところで、畏れは気概的能力のうちにある。したがって、高慢もそうである。

⁷⁹ Augustinus, *De civitate dei*, XIV, 13, 1 (CCSL 48, 434).

あると言っている。ところで、「高くそびえる困難なことから(arduum)」は気概的能力の対象である。それゆえ、高慢は気概的能力のうちにある。

反対異論3. 卑屈は高慢に対立する悪徳だと思われる。ところで、卑屈は高邁と同じく気概的能力のうちにある。それゆえ、高慢も気概的能力のうちにある。

第3項主文 次のように言わねばならない。この問題を明らかにするためには、最初に魂のどんな能力のうち罪や徳がありうるかを〔一般的に〕考察する必要がある。そうしてはじめて、高慢が魂のどんな力を基体としてそのうちにあるかを考察できるからである。

そこではじめに、徳の行為と罪の行為はすべて意志的であることを考察しなければならない。私たちのうちには意志的行為の根源が二つある。理性あるいは知性、および欲求である。『デアニマ』第3巻⁸⁰で言われているように、これらは運動を引き起こす二つの原因であり、人間に固有の行為に関してはとりわけそうである。ところで、理性は認識の力であるから欲求の力とは次の点で異なる。すなわち、理性だけでなく認識能力のはたらきはすべて、認識されたものが認識するものうちにあることにおいて完成する。たとえば、現実にはたらいっている知性は現実に知性認識されたものであり、現実にはたらいっている感覚は現実に感覚知覚されたものである。これに対して、欲求能力のはたらきが成り立つのは、欲求するものが欲求される事物へと動くことにおいてである。ところで、人がいわば自己自身を拡大することによって、自分の卓越へと無秩序に向かうことが固有の意味で高慢に属することは明らかであり、『詩篇』[第9篇18節]⁸¹の「人が地上にこれ以上自分を拡大しようと思わないように、孤児とへりくだる者のために裁きを下すこと」という言葉がその証拠になる。したがって、高慢が欲求の力に属することは明らかである。

ところで、認識された善が欲求を動かす限りにおいて、欲求の力は認識の力によって何らかの仕方では動かされるから、様々に異なる認識の特質に即して欲求の力が区分されるのは必然である。なぜなら、受動的なものは能動的なものや動かすものに対応し、能力は対象に応じて区分されるからである。ところで、認識の力のうちには、普遍に関わるもの(すなわち知性あるいは理性)と個物に関わるもの(すなわち感覚や表象力)とがある。ここから結果的に二通りの欲求の力が区別される。ひとつは理性的部分における欲求能力で、これが意志と呼ばれる。もうひとつは感覚的部分における欲求能力で、これが感覚的欲求と呼ばれる。

したがって、理性的欲求つまり意志は、対象に固有の本質側面として普遍的善をもつから、複数の能力に分割されることはない。他方、感覚的欲求のほうは、感覚や想像で捉えられる善の個別的特質に達するだけで、善の普遍的な本質に達することはない。したがって、こうした善の多様な個別的特質に応じて感覚的欲求は区分されることになる。たとえば、感覚に即して快いものであることから或るものは欲求されうるという性格をもち、この善の特質によって、当のものは欲望的能力の対象となる。さらに、別のものが欲求されうるという性格をもつ場合もある。それは動物

⁸⁰ Aristoteles, *De anima*, III, 10, 433a13-18.

⁸¹ 新共同訳では10, 18にあたる。現行ヴルガータはLXXにもとづく翻訳(iudicare pupillo et humili ut non apponat ultra magnificare se homo super terram)と、ヘブライ語からの翻訳(ut iudices pupillum et oppressum et nequam ultra superbiat homo de terra)を伝えるが、ここでトマスの引用は前者に従っている。新共同訳:「〔主よ、あなたは〕みなしごと虐げられている人のために裁きをさせていただきます。この地に住む人は再び脅かされることのないでしょう。」フランシスコ会訳:「あなたが、みなしごと虐げられた者の権利を守ってくだされば、地から生まれた者が、もはや人を脅かすことはありません。」

によって想像された何らかの「高さ (altitudo)」——そのおかげで害になるものをすべて排除でき、自己の善を力強く利用できる——をもつことによる。動物が相手を倒すために戦う場合のように、この種の善はあらゆる感覚的快樂なしにあり、むしろ時には感覚的苦痛を伴うこともある。想像された善のこうした特質に即して、気概的能力の対象が理解される。

ここで、個別的なものはすべて普遍的なものに含まれるが、その逆は言えないことは明らかである。したがって、気概的能力と欲望的能力が向かいうるあらゆる対象に対して意志もまた向かいうるし、他の多くの対象にも意志は向かいうる。ただし、意志は身体器官を用いないから、情念なしに自己の対象に向かうのに対して、気概的能力と欲望的能力が対象に関わる時には情念を伴う。したがって、愛、喜び、希望などの情念を伴って気概的能力と欲望的能力のうちにある運動はすべて、意志のうちにもありうるが、その場合には情念を伴わない。

ところで、すでに〔第2項主文で〕述べたことから、高慢の対象は卓越であることは明らかである。したがって、もし感覚や想像によって捉えられる卓越だけが高慢に属するとしたら、高慢は気概的能力のうちのみあると見なさなければならないであろう。しかし、グレゴリウスが『道徳論』第33巻⁸²で言うように、霊的善の領域における知的卓越にも高慢は関わる。さらに、感覚的欲求をもたない霊的実体のうちにも高慢は見出される。それゆえ、一方で、感覚や想像の捉える卓越に関わる限りにおいて、高慢は気概的能力のうちにあり、他方で、知性の捉える卓越に関わる限りにおいて、そして悪霊たちのうちに見出されるという意味では、高慢は意志のうちにもあると言わなければならない。

異論解答 1. 高慢は卓越への無秩序な欲求である。ところで、欲望が絶対的に理解された善に関わるのに対して、希望は将来の困難な善に関わる。したがって、高慢は主として希望に関わることは明らかであるが、希望は気概的能力の情念である。実際、無秩序な希望を意味する僭越もとりわけ高慢に属すると思われる⁸³。

異論解答 2. すでに〔主文で〕述べた通り、知性の捉える卓越に関わる高慢は、気概的能力のうちではなく意志のうちにある。しかし、知性の捉えた卓越に何らかの想像された結果が時として伴う場合があり、この観点からは高慢は気概的能力のうちにありうる。たとえば、人が知識の卓越のゆえに賞賛されたり、感覚に訴える何らかの名誉を受け取ったりする場合がそうである。

異論解答 3. すでに述べた通り、悪魔たちの高慢は気概的能力のうちにはないとはいえ、やはり意志のうちにはたしかにある。

異論解答 4. 対象には二通りある。ひとつは、はたらきが向かう到達点という仕方であり、この意味では神は気概的能力の対象ではありえない。もうひとつは、はたらきが生じる出発点という仕方であり、その場合、侮蔑されるものは侮蔑という行為自体の対象である。この意味では、神が気概的能力の対象であることを妨げるものは何もない。すなわち、神への畏敬によって引き止められることなく気概的能力が固有の対象に向かうという限りにおいてである。

異論解答 5. 気概的能力 (vis irascibilis) は実際には多くの情念の基体であるが、いわば最終的な情念としての怒り (ira) にもとづいて名づけられている。それゆえ、アヴィセンナも他の諸情念に即してではなく怒りという情念のみに即して気概的能力を説明しているのである。

⁸² Gregorius, *Moralia*, 正しくは XXXIV, 23, 49 (CCSL 143B, 1768). 第2項異論3で引用されている箇所。

⁸³ 僭越 (praesumptio) については ST II-II, q.130 で論じられている。

異論解答 6. 嫉妬は気概的能力のうちではなく欲望的能力のうちにある。なぜなら、嫉妬は「他者の善に対する悲しみ」⁸⁴であるが、悲しみは喜びと同じく欲望的能力のうちにあるからである。また、愛と同じく憎しみもこの同じ力に属する。——しかし、たとえ嫉妬が気概的能力のうちにあると仮定しても、高慢が嫉妬の原因だからといって、高慢が気概的能力のうちにあってはならないということにはならないだろう。なぜなら、或る能力のひとつの行為や情念が同じ能力の別の行為や情念の原因であることを妨げるものは何もないからである。たとえば、愛と欲望は両方とも欲望的能力のうちにあるが、愛は欲望の原因である⁸⁵。

異論解答 7. 悪徳に何らかのはたらきが属するのに三通りの場合がありうる。第一は直接的に、第二は先行する場合、第三は後続する場合である。たとえば、怒りには直接的かつ本質的には報復の欲求というはたらきが属する。そして、もたらされた何らかの不正を悲しむはたらきが先行し、不正をもたらした人への罰を喜ぶはたらきが後続する。これと同様に、高慢に直接的に、いわば本質的に属するのは卓越に対する節度のない欲求である。そして、高慢に先行するのは、自分はその卓越がふさわしいほどの人物だと判断することであり、後続するのは、その判断と欲求から言葉と行動による誇示へ突き進むことである。これら三つのうち、第一のはたらきは気概的能力に属し、後の二つは理性に属する。実際、理性による認識は欲求の運動に先立ち、外的行為による実行に関わる理性の命令は欲求の運動に後続する。

異論解答 8. 同じ人のうちに謙遜と知恵が見出されるのは、謙遜が知恵に向けて状態を整えるからである。というのも、へりくだる人はものを学ぶために知者に従い、自分だけの考えに頼らない。しかし、知恵と謙遜が魂の同じ部分のうちにある必要はない。なぜなら、優れた表象力が学知への準備を整える場合のように、下位の部分のうちにあるものが上位の部分に属するものに向けて整えることもありうるからである。

異論解答 9. 真理の認識は高慢に対して先行的に関わる。なぜなら、真理を認識している限り、人は自分に固有の尺度を超えて思い上がることはないからである。

異論解答 10. 見せかけは高慢に対して後続的に関わる。というのは、人前で何らかの意味で優れたものとして自分を外的に示す行動は、人が卓越を欲した結果として生じるからである。

異論解答 11. 自分自身に関して、より高いことがらを感じ取ることが高慢の最初のはたらきだと言われるのは、このことが卓越への欲求に先立つからである。

異論解答 12. 理性は下位の諸能力を支配し動かす限りにおいて、秩序を外れた運動からそれらを遠ざける。したがって、そのような理性のうちにあるという意味で、神の法は高慢を退ける。だがそれは、黒が白を取り除くように形相因的なあり方ではなく（仮にそうだとしたら、神の法と高慢は同じ基体のうちにあることになるだろうが）、画家が黒色を取り除くような作用因的なあり方である。したがって、神の法が存する理性のうちに高慢もあるということには必ずしもならない。

異論解答 13. 高慢が他のすべての悪徳の女王と言われるのは、その支配力が他のすべての悪徳に拡散して及ぶ限りにおいてである。しかしこれは、高慢の目的が他の諸々の悪徳の目的に対して

⁸⁴ Damascenus, *De fide orthodoxa*, II, 14 (Buytaert 121); Nemesius, *De natura hominis*, 19 (Verbeke 101).

⁸⁵ 論旨が不明。異論に対して、気概的能力のうちにある高慢が欲望的能力のうちになり立つ嫉妬の原因になることがあってもかまわない（因果関係は能力の違いをまたいで成り立ちうる）と解答するのが自然に思えるが、ここはそういう説明ではない。

有する秩序のゆえであり⁸⁶、高慢が理性のうちにあるからではない。

異論解答 14. 異論の典拠は異端が高慢の結果であることを示している。しかし、魂の或るひとつの力のうちにあるものが、魂の別の力のうちにその結果をもつことを妨げるものは何もない。

異論解答 15. 第一の罪が理性のうちにあると言われているのは、先行的な意味である。他方、欲求のうちには罪は本質的な意味で存する。すなわち、欲求能力が何らかの不正なものに向かう限り、あるいは、そのことによって理性の判断が妨げられる限りにおいてである。

異論解答 16. 魂の下位の力のうちに罪が生じるのは理性の正しさから離れることによる。したがって、正義が何らかの意味で理性に属するとしても、だからといって、すべての罪が本質的に理性を基体としてそのうちにあるということには必ずしもならない。

異論解答 17. 罪が意志的あるいは自発的と言われるのは、罪の行為が意志から直接出てくる場合だけでなく、下位の諸能力のはたらきを命じる意志によって、その行為が命じられたものである場合にもそうである。したがって、何らかの意志的な罪が魂の下位の能力のうちにあってもかまわれない。

異論解答 18. 『倫理学』第6巻⁸⁷で言われているように、ソクラテスはすべての徳を或る種の知だと考えた。したがって、彼はすべての徳は本質的に理性的部分のうちにあると見なしたのであり、この点でストア派も彼に従っている⁸⁸。しかし、倫理徳がより直接的に完成させるのは、理性自体ではなくむしろ欲求能力であるから、アリストテレスに従って、倫理徳は欲求能力のうちにあると言うほうが適切である。ただし、理性の命令を通じて動かされる限りにおいて、欲求能力もまた分有によって理性的である。

異論解答 19. 『倫理学』第5巻⁸⁹で言われているように、正義によって法に従うよう秩序づけが行なわれるという意味で、すべての徳は何らかの意味で正義である。したがって、正義はたしかに意志のうちにあるとはいえ、しかし、今述べた意味で正義の名称を受け取るすべての徳が理性や意志のうちにあると言う必要はない。なぜなら、理性と意志は魂の他の諸能力を動かさうからである。

異論解答 20. 感覚や想像が捉える名誉を、それが困難や卓越といった本質側面を有する限りにおいて欲求することは、意志にのみ属するのではなく気概的能力にも属する。

異論解答 21. おごり高ぶることは、自分に固有の尺度を外れて超えて行くことである。しかしこのことは、上位の能力だけではなく下位の能力にも当てはまりうる。

異論解答 22. 気概的能力の情念はすべて、欲望的能力の情念である愛から始まり、喜びと悲しみで終わるが、これらもまた欲望的能力のうちにある。したがって、本来は欲望的能力に属するものが、先行あるいは後続するものとして気概的能力のうちにある高慢に帰されるとしても、それを妨げるものは何もない。

このことによって、続く異論に対する解答も明らかである。

⁸⁶ 第2項主文で論じられた通り。

⁸⁷ Aristoteles, *Ethica Nicomachea*, VI, 13, 1144b28–30.

⁸⁸ cf. Augustinus, *De civitate dei*, IX, 4 (CCSL 47, 251–253). 異論で引用されたセネカも参照 (*Epistulae morales*, 76)。

⁸⁹ Aristoteles, *Ethica Nicomachea*, V, 1, 1129b26–30; V, 2, 1130b22–26.

第4項 高慢の種^{しゅ}について

第四に、グレゴリウスが『道徳論』第24巻⁹⁰で挙げている高慢の種について問われる⁹¹。彼はこう言っている。「実際、傲慢な人々のあらゆる高ぶりを示す四つの種がある。第一に、自分は自分自身の力によって善をもっていると判断する場合である。第二に、自分に与えられた善は天からのものだと思いつつも、これを受け取ったのは自分の功德のおかげだと見なす場合。第三に、実際にはもってもないのに、とにかくもっていると誇示する場合。第四に、他人を軽蔑して、自分だけが特別に注目されたいと欲する場合である。」

しかし、これらの高慢の種は適切に挙げられていないと思われる。というのは――

異論1. 自分が善をもっているのは他者によるのではなく自分自身の力によると判断することは、不信仰に属する。なぜなら、正しい信仰は神こそがすべての善の創始者だと見なすからである。それゆえ、自分自身の力によって善をもっていると判断することは、高慢の種と見なされるべきではなく、むしろ誤謬や不信仰の種とされるべきである。

異論2. この世の生において人がもつあらゆる善のうちで最高のものは恩寵の善であるが、それについてさえ人々がおごり高ぶることがありうる。ところで、恩寵は功德によって人に与えられると信じることはペラギウス派の異端に属する⁹²。それゆえ、自分のもっているものは自分の功德のゆえに神から自分に与えられたものだと思ふことは、高慢の種と見なされるべきではない。

異論3. もっていないものをもっていると自慢することは虚言に属するが、虚言は高慢とは区別される悪徳である。それゆえ、そういう自慢は高慢の種と見なされるべきではない。

異論4. 注目されたいと願うことは虚栄に属する。しかし、グレゴリウスが『道徳論』第24巻⁹³で言うように、虚栄は高慢そのものではなく高慢の娘である。それゆえ、自分だけが特別に注目されたいと欲することは、高慢の種と見なされるべきではない。

異論5. 恩知らずに見えることほど高慢なものはないとヒエロニムス⁹⁴は言う。ところが、忘恩は先の四つの種のうちに数え入れられていない。それゆえ、グレゴリウスは高慢の種を十分に枚挙していないと思われる。

異論6. アウグスティヌスは『神の国』第14巻⁹⁵で、犯した罪の自己弁護をすることは高慢に属すると言っている。ところが、このことは当該の高慢の種のうちに数え入れられていない。それゆえ、高慢の種は十分に言及されていない。

⁹⁰ Gregorius, *Moralia*, 正しくは XXIII, 6, 13 (CCSL 143B, 1153). cf. a.3, arg.7 et ad7.

⁹¹ 第4項の並行箇所: *ST II-II*, q.162, a.4; *In Sent.* II, d.42, q.2, a.4; *In I Cor.* c.4, lect.2.

⁹² cf. Petrus Lombardus, *Sententiae*, II, d.28.

⁹³ Gregorius, *Moralia*, 正しくは XXXI, 45, 87 et 89 (CCSL 143B, 1610 et 1611). ただし、グレゴリウスは「娘 (filia)」ではなく「子孫 (soboles)」と言っている。

⁹⁴ Hieronymus, *Epistula 148*, n.4 (PL 22, 1206).

⁹⁵ Augustinus, *De civitate dei*, XIV, 14 (CCSL 48, 436). イブが蛇に、アダムがイブに責任転嫁をしたことをアウグスティヌスは論じている。Sed est peior damnabiliorque superbia, qua etiam in peccatis manifestis suffugium excusationis inquiritur. [...] Nusquam hic sonat petitio veniae, nusquam imploratio medicinae. 「しかし、いっそう悪質で非難すべきなのは、明らかな罪においても弁解の逃げ場を探そうとする高慢である。[...] ここには赦しを乞う懇願も、癒しを求める哀願もまるで聞こえない。」

異論7. 自分の力を超えたものを手に入れることへと分不相応に向かうことが何よりも高慢に属すると思われる。ところが、このことは先の四つの種のうちでは言及されていない。それゆえ、高慢の種は十分に言及されていないと思われる。

反対異論 これらに反論するには、すでに引用されたグレゴリウスの権威で十分であろう。

第4項主文 次のように言わねばならない。ディオニシウスが『神名論』第4章⁹⁶で言うように、「善はひとつの全体的原因から生じるのに対して、悪は諸々の個別的欠陥から生じる。」これはちょうど、身体のすべての部分がふさわしいあり方をしていることから美しさは生み出されるが、それら諸部分のひとつだけでもふさわしくない状態になれば醜さがもたらされるのと似ている。したがってこのような意味で、人間の欲求が理性の規準と自己の尺度にもとづいて何らかの卓越へ向かうことは徳に属する。他方、高慢という悪が成り立つのは、何らかの卓越した善を欲求する場合に自己に固有の尺度を超え出ることにおいてである。それゆえ、自分の卓越を欲求する際に自己に固有の尺度を超え出ることが生じるあり方の数に応じて、その分だけ高慢の種がある。

ところで、このことは三通りに生じうる。はじめに、人が欲する卓越した善そのものに関してである。すなわち、或る人の欲求が自己の尺度を超えた対象に向かう場合であり、この点に即して、実際にはもっていないものをもっていると自慢するという高慢の第三の種が成り立つ。もうひとつのあり方は、獲得の方法に関してである。すなわち、他者の恩恵によってはじめて手に入れることのできる卓越を、自分自身や自分の功德に由来するものと見なす場合である。この意味で最初の二つの種が理解される。なぜなら、何かが私たちに由来するのみに二通りがありうるからである。ひとつは、私たちが何かをなす場合のように端的な意味においてであり、もうひとつは、私たちが何かを受けるのにふさわしい場合のように或る種の準備によってである。三つめのあり方として、所有の方法に関して自己に固有の尺度を超えることがありうる。すなわち、それをもつ力が自分にも他人にも同じだけあるものを、他人を超えてもっている気になる場合がそうである。〔これが、自分だけが特別にもっていると思ひ込む高慢の第四の種である。〕

異論解答1. 理性による判断は二通りの仕方で腐敗する。ひとつは普遍的なあり方であり、もうひとつは何らかの情念による個別的なあり方である。したがって、信仰や善い習慣に属することがらに関わる正しい判断の腐敗は、普遍的なものである場合には異端という罪に属する。他方、判断の腐敗が情念による個別的なものである場合にはそうではない。これは『箴言』第14章[22節]の「悪をなす人はみな迷い誤っている」という言葉から明らかである。たとえば、もし人が一般論として姦淫は罪でないと考えているとしたら、この人はたしかに不信仰者であろう。これに対して、情欲の情念のゆえに姦淫の行為を善いものとして選択する私通者は不信仰者とは見なされない。同様に、神はすべての善の創始者ではないとか恩寵の善は功德によるとか、一般的にそう判断するとしたら、これは異端の印であろう。しかし、卓越を求める無秩序な愛（それは情欲のうちに源をもつ）のゆえに理性の判断が個別的な仕方で腐敗した結果、自分自身の力によって、あるいは自分の功德のおかげで何らかの善をもつことができるとうぬぼれる場合がある。だがこれは異端ではなく、むしろ高慢な人の特徴である。

⁹⁶ Dionysius, *De divinis nominibus*, c.4, § 30 (PG 3, 729C).

異論解答 2. このことから異論 2 に対する解答は明らかである。

異論解答 3. 自慢が高慢の種と見なされるのは、すでに述べたような⁹⁷ 高慢に後続する仕方に関わる外的行為に関してではない。そうではなく、そういう外的行為を生じさせる源である内的な意図に関してである。すなわち、もっていないものをもっているかのようにうぬぼれる場合、そして、そのもっていないものをもたない限りは自分に当てはまらない、そういう卓越に当人の精神が向かう場合である。

異論解答 4. 自分だけが特別に注目されたいと願うこともまた、後続的な仕方ではたしかに高慢に属する。しかし、この高慢の第四の種が本質的に成り立つのは、あたかも自分だけが特別にすべての人よりも優れているかのようにうぬぼれ、こうした卓越に向かって当人の精神が強く動かされることにおいてである。

異論解答 5. 最初の二つの種は忘恩に属する。というのも、無償で自分に与えられた恩恵に気づかない人や、それを自分自身の功德のおかげで手に入れたのだと判断する人は、恩知らずだからである。

異論解答 6. 哲学者が『倫理学』第 5 卷⁹⁸で言うように、悪を欠くことは善の性格をもつものとして理解される。したがって、実際にはもっていないものを自分がもっていると自慢することが第三の種に属するのと同様に、実際にはもっている罪について〔自分は罪をもっていないと〕自己弁護することもまた、第三の種に属する。

異論解答 7. 高慢の罪は時として、それが本質的に成り立つ場面によってよりも、むしろ先行するものや後続するものを通じて、より明瞭に現われることがある。したがって、高慢のすべての種は本質的には魂の分不相応なうぬぼれのうちに成り立つことは確かだが、グレゴリウスはあえて先行するはたらきや後続するはたらきに即して高慢の種を挙げたのである。

文 献

底本として *Sancti Thomae Aquinatis opera omnia. iussu Leonis XIII P. M. edita, tomus 23, Quaestiones disputatae de malo*. Roma: Commissio Leonina, 1982 を用いる (レオ版と略記)。ただし、段落わけと綴り字はレオ版に従わない場合もある。 *Quaestiones disputatae*, vol. II, ed. P. Bazzi et P. M. Pession, Roma: Marietti, 1949 (マリエッティ版) 所収のテキストも適宜参照した。

レオ版にもとづく三種の現代語訳を参考にした。(1) *On evil*. tr. John Oesterle and Jean Oesterle, Notre Dame, Indiana: University of Notre Dame Press, 1995. (2) *On evil*. translated by R. Regan; edited with an introduction and notes by B. Davies, New York: Oxford UP, 2003. (3) *Questions disputées sur le mal*. tr. les moines de Fontgombault, 2 vols., Paris: Nouvelles éditions latines, 1992.

アウグスティヌスについては、 *Corpus christianorum, series latina*, Turnhout: Brepols, 1954- (CCSL) と *Corpus scriptorum ecclesiasticorum latinorum*, Wien, 1887- (CSEL) をおもに用いた。それ以外に註で引用・参照した版は下記の通りである。

Anselmus, *De casu diaboli*. in *S. Anselmi Opera Omnia*, vol. I, ed. F. S. Schmitt, Stuttgart: Friedrich Frommann Verlag, 1968.

Bernardus, *Liber de gradibus humilitatis et superbiae*. in *S. Bernardi Opera*, vol. III, ed. J. Leclercq et H. M. Rochais,

⁹⁷ 第 3 項異論解答 7 を参照。

⁹⁸ Aristoteles, *Ethica Nicomachea*, V, 1, 1129b8-9.

- Roma: Editiones Cistercienses, 1963.
- Damascenus, *De fide orthodoxa: Versions of Burgundio and Cerbanus*. ed. E. M. Buytaert, St. Bonaventure, NY: Franciscan Institute Publications, 1955.
- Decretum Magistri Gratiani*, in *Corpus Iuris Canonici*, pars 1. ed. E. L. Richter et E. A. Friedberg, Leipzig: Tauchnitz, 1879. Reprint, Graz: Akademische Druck- u. Verlagsanstalt, 1959.
- Gregorius Magnus, *Moralia in Job*. ed. M. Adriaen, 3 vols. CCSL 143, 143A, 143B, Turnhout: Brepols, 1979–85.
- Petrus Lombardus, *Sententiae in IV libros distinctae*, tomus I, pars II (liber I et II). Grottaferrata: Editiones Collegii S. Bonaventurae, 1971; tomus II (liber III et IV). 1981.
- Nemesius, *De natura hominis: Traduction de Burgundio de Pise*. ed. G. Verbeke et J. R. Moncho, Leiden: Brill, 1975.
- Seneca, *Ad Lucilium epistulae morales*, tomus I. ed. L. D. Reynolds, London: Oxford UP, 1965.